文を読み、文を書く
―書評ゼミの挑戦―

歴史学研究室

二〇〇八年四月に着任して以来、放課後に古文書講座を開いてきた。自主的な取り組みにも拘らず、毎年二十人弱の参加者がいる充実した講座であったが、新型コロナウイルスが猖獗を極めたため、二〇二〇年度以降、中断せざるを得ない状況に追い込まれた。

古文書講座は、くずし字の解読・読解法の教授を行うのみならず、歴史資料としての古文書を理解する取り組みでもある。くずし字は扨置き、古文書というものを理解するには現物に触れて体感する必要があり、かつ古文書は全て一点物であるため、感染リスクが低い状況にあっても講座の開催に際しては次のような問題が生じる。

一つは、現場で一つの資料を多数の学習者が触る事態を回避できないこと。いま一つは、参加者全員に同一資料を持ち帰らせることが不可能なこと。この二点を解決できないまま一年が過ぎ、方針を決めかねたまま新年度に突入した。

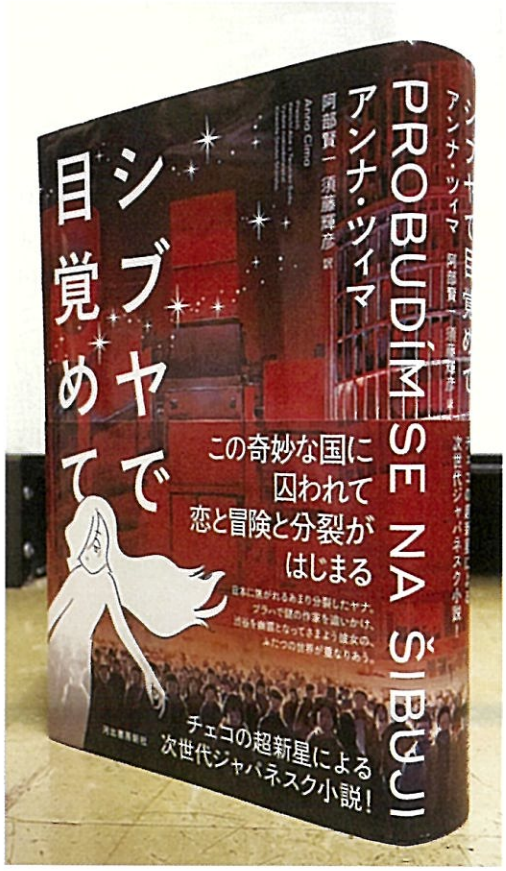
折節、二〇二一年一月より、担当者曰く「熊日の顔」である『熊本日日新聞』「〇〇が読む」を受け持つことになり、三か月に一度の頻度で約一、四五〇字の書評を執筆する運びとなった。「書評」と呼ぶからには、自身の批評眼から内容を剔抉しながら作品の位置づけを行い、一般読者向けという制限内で可能な限り格調高く洗練した文体・表現に仕上げつつも短い字数の枠に落とし込んだ文章を紡ぐ必要があり、さらには、これを定期的に産出せねばならない。そのためには、高い水準にある新しい着想、構成、展開、文章表現、そして目配りの利いた選書とそれらを継続して支える幅広い教養（の摂取）が常に求められる。

かような二つの課題を抱えていたところ、書評ゼミという新しい企画に思い至った。書評指導ならば文学部の学びとしても適切であるし、購入もしくは貸与すれば参加者全員の手元に課題本を置くことも可能である。私にとっても普段注意を払わない書籍に目を向ける機会となる。何より、リモートでも運営しやすい内容であることが決め手になった。

当ゼミは、選書した書籍について参加者全員が書評を執筆・披露し、議論して練り上げ、これを数度繰り返して各自の作品を粘り強く完成させていく流れで展開している。これまでに対象としたのは、いとうせい

こう『小説禁止令に賛同する』（集英社文庫）、アンナ・ツィマ（Anna Cima）著、阿部賢一・須藤輝彦訳『シブヤで目覚めて』（河出書房新社）、村田沙耶香『コンビニ人間』（文春文庫）の三作品。

この中から、前記「〇〇が読む」（二〇二一年八月一日）で取り上げたチェコ人作家ツィマの『シブヤで目覚めて』を対象に、書評ゼミの参加者四人が作成した評を掲載する。参加者はいずれも日本語日本文学科の一年生で、入学から一年足らずではあるが、大学での学びを得て新しい世界に挑戦した四人の冒険に刮目していただきたい。（大島）



それぞれが抱える「想い」の行方

江崎　萌

もし、今存在している場所とは別の場所で、もう一人の自分が幽霊でもドッペルゲンガーでもない「想い」の形として生きていたとしたら……。

本書は、プラハで謎の作家を追いかけるヤナと、七年前に来日して分裂し「想い」として渋谷に囚われてしまったヤナの二つの視点から展開されていく物語だ。

ヤナは、チェコのカレル大学で日本文学を専攻する大学生だ。彼女は村上春樹の『アフターダーク』を読んだことを機に、日本文学や文化に興味を持った。プラハにいるヤナは、ある日、図書室で『分裂』という短編を発見する。そして、これを書いた大正時代の作家、川下清丸に惹かれ、院生の青年クリーマと共に彼のことを調べ始める。一方、来日後、このまま日本に残りたいと強く願っていたヤナは誰にも気づかれず、連絡もできない「想い」の状態で渋谷に囚われてしまう。途方に暮れていたヤナだが、やがて解決法を探り始める。一見別々の話のように思われる二人のヤナの世界は、徐々に重なっていく。

本書の特徴は、様々な要素が複雑に絡み合いながら

一つの物語として展開していくことだ。そのひとつに、日本とチェコの文化の違いに関する描写が挙げられる。ヤナがキャラクターグッズばかりを身に付けている日本人に対して「ある意味ひどく幼稚だ」と感じる部分や、日本では模範的な音楽が求められるが、チェコでは音楽との「対話」を重視していることなど、どちらか片方の立場では気づかないような違いをヤナの目線で知ることができるのだ。

また、川下清丸は架空の作家であるが、本書では横光利一の日記に登場したり、菊池寛の雑誌に小説の掲載を断られたりするなど、まるで実在した人物であるかのように詳細に語られる。（実際にチェコの読者の多くも実在する作家だと勘違いしたらしい）

さらに、読者はヤナとクリーマが川下のことを調べていく過程を同時に追うことができる。彼らは川下の著作『恋人』を翻訳するだけでなく、川下の家族構成や日記の読解、文学理論の勉強などに取り組む。一人の作家にかける青春。それは、必ずしも華やかなものではない。だが、「理論の蜘蛛の巣の上で身動きできない」と感じるほど苦戦し、必死にもがきながらも、地道に川下の真の姿を追い求めていく二人の姿はとても魅力的だ。『恋人』の内容は翻訳作業とともに展開され、その内容は一部、ヤナとクリーマの関係性にも繋がっていく。この手法によって、読者は物語の世界観に次第に引き込まれていくようになる。

本書の中には、日本にいたいという想いから分裂したヤナ以外にも、様々な「想い」を抱えた人々が登場する。一心に熱中する者、愛する者、執着する者。それぞれの想いが強くなり、何らかの形となっていくとき、私達が生きているこの世界は変わっていくのかもしれない。

実は、主人公ヤナと、作者のアンナ・ツィマには共通点が多い。アンナ自身もカレル大学で青春時代を過ごしているのだ。ヤナ同様に日本が好きである彼女は、二〇〇九年に来日し、一カ月間、渋谷の路上を見て過ごしたという。古い歴史を持つ街プラハで育ち、現代の若者の文化が集う街、渋谷を訪れたアンナはそこで何を感じたのか。この物語のテーマとも言える「想い」という言葉には、作者であるアンナ自身の学生生活や日本への感情も投影されているのかもしれない。

このように、本書は様々な要素や仕掛けが絡み合いながら展開していく。読み進めていく度に新たな発見がある。先が気になり、急ぎながらページをめくっていくうちに、読者も物語の世界に「囚われて」しまう。

「想い」の所在

川越　梨央

この本の帯にかかれている「この奇妙な国に」というのがみえるだろうか。作者名からわかる方もいると思うがこの物語を書いたのはチェコ出身者だ。つまりチェコが故郷の人から見た日本が描写されている訳である。文化相違が文章の端々に表れていて興味深い。例えば、作中に「日本ではマリファナにすら厳しい罰則が課せられる。」という一文がある。日本では、マリファナを所持しているだけで（非営利、営利目的などで細かく分かれるが）少なくとも5年以下の懲役刑が科せられる。一方、チェコでは２００９年に定められた新法により大麻は「少量」の栽培と所持を解禁した。定められた「少量」の量を超えるとチェコでも罰せられるが駐車違反などと同等の罰金の軽い罰則である。これは面白い文化の違いだと考えた。

この本は、プラハの大学の日本研究科に属する学生、主人公ヤナ・クプコヴァーが日本を想うあまり日本とプラハに分裂し彷徨う物語である。ヤナはプラハで日本文学を研究途中、正体が謎の作家「川下清丸」の「分裂」という短編小説に魅せられる。川下はネットで調べても何も出てこず、日本の作家が一覧で載っている「作家事典」で調べてもたいした情報がでてこない。やっと手に入れた川下の他作品も翻訳が思うように進まない。しかし、川下がいた時代の文学を研究している同級生ヴィクトル・クリーマが現れ、川下研究を協力してくれるようになる。物語に登場するヤナとクリーマの文学研究への姿勢は尊敬できるものがある。本文に「しつこい性格の人でなければ日本研究者になれない」という一文がある。異国の物語をいちから翻訳するのだけでも大変な労力がいるのだ。大正時代前後の近代文学研究となると今は使われていない漢字や表現も多用されているのでより難しいだろう。単語や言い回しをメモに書き留めて一文一文地道に翻訳していく。また、川下の情報を集めるために出身地、同時期の作家探しなど様々な角度からの取り掛かりが描写されている。ヤナたちと同じ日本文学を専攻している私としては我慢強く研究に取り掛かる姿に憧れをもたずにはいられなかった。ヤナは最初クリーマに対抗心をもつが一緒に研究していくうちに親しくなり好意を持つようになる。ヤナとクリーマの恋愛模様も見どころの一つだ。

本作品の魅力として、４つの場面が同時に描かれ、絡み合っていく面白い構成であるところだと考える。日本文学に興味をもつようになったきっかけなどが描

かれる、幼少期から大学生までのヤナ。渋谷を幽霊になって彷徨うヤナ。謎の日本人作家、川下を追いかけるプラハでの大学生のヤナ。そして、ヤナが翻訳している川下の作品。渋谷を彷徨う17歳のヤナはある人を見かけ、おもしろい行動に惹かれ追いかけてみることにする。すると、その人は実はクリーマと交流のある日本人であり、チェコでのヤナの友人の兄だったということが後半につれてわかる。17歳のヤナと大学生で日本に留学してきたクリーマと時間を超えて出会い川下についての調査をともにする、と物語が進むにつれ交差してくる。じっくり読むと気づく小さな関連性など間違い探し的な面もあり解けていく感じが面白い。

この作品の鍵となっている「想い」は様々なかたちで表れている。日本に幽霊となって彷徨うヤナは最後川下について重要な情報を掴み解放される。これはヤナの川下研究に関する強い「想い」ゆえだろう。渋谷を彷徨うヤナは誰の目にも映らない、しかし日本に留学中のクリーマだけはヤナのことを見つける。これはクリーマのヤナへの「想い」の表れだ。私たちの想いはどこにあるのだろうか。この作品を読んで私も考えていきたいと思った。

想いの形

杉　綾乃

この物語は、架空の日本文学作家、川下清丸に魅せられた主人公ヤナの心と体が分裂し、幽霊として、また人間として彷徨いながら自分を探す冒険小説だ。カレル大学で日本語を学ぶチェコ人のヤナが、架空の日本文学作家、川下清丸の作品「分裂」に魅せられるうちに、自身の精神と肉体も分裂し、シブヤとプラハの地を彷徨うことになる。

本書のポイントは異文化との出会いである。特にチェコの人から見た日本観がよく表れている。抹茶と小豆のアイス、寿司は日本食の象徴とされ、漢字は絵として認識されて挿絵と同じ扱いをされている。街中に溢れ、老若男女問わずに愛されるマスコットやキャラクターは、幼稚な一面を持つ日本人の精神を表すものとして捉えられている。また、作中に出てくる日本文学、その中でも大正、昭和の文学、文豪と綿密な川下像の設定が巧妙に結びついており、川下が実際に存在した作家であると錯覚させるくらいリアルな描写がされている。さらに、ヤナによる日本文学の翻訳を通して、本書だけでなく血縁関係の壁が立ちはばかる歪な恋の形を描いた川下の作品「恋人」や関東大震災を題

材にした「揺れる想い出」を読むことができ、二重の読書体験をすることができる。

私はこの本を読んで、想いの形、存在について考えさせられた。日本に恋い焦がれるあまりに肉体と精神が分裂したヤナは、最初はただ、束縛の激しい恋人から逃げたい、好きの感度が合わない同級生と離れて刺激的な体験をしたい、チェコに帰りたくないといった現実逃避的な思いをハチ公像の横で願い、シブヤに囚われるところから始まる。シブヤの地で呪いにかかりチェコに帰れないことを嘆いていたヤナだったが、渋谷で活動しているバンドマンの仲井を助けたことで、ハチ公像の横で願ったことは無駄ではなく、実態のない幽霊のような自分は無価値なものではない、と自己の存在意義を認めることができるようになっている。ここにおいて、ヤナの自己中心的な思いは人を救う想いへと昇華している。

このことから、幽霊になったヤナは人間の想いのあり方について象徴しているのではないだろうか。もちろん、現実世界で分身することなどありえないが、分裂をも起こし得るほどの強い想いが我々人間には備わっていること、また、想いは自分の存在を認める手助けとなることを、作者は2人のヤナを通して伝えたかったのではないだろうか。

本書では一貫してシブヤのハチ公前を通る人々の、互いに関心がない様子が強調して描写されている。ここでの人々は、目に見える互いの姿でさえ素通りして、ないがしろにしてしまっている。しかし、その一方でチェコから日本という遠い地を一心に見つめ、川下の謎の解明に挑むヤナの姿や、実態が無くなったヤナを唯一視認することのできる恋人のクリーマが描かれている。この対比は、目の前で見過ごされる想いを救い上げるためのものではないだろうか。想いは私達が生きている以上必ず生じるものである。当たり前のことであるが故に軽視し、見落としてしまいがちだが、クリーマと2人のヤナを通して想いの影響力、目に見えないが確かにある存在を改めて感じた。また、ヤナの見た目だけで外国人だからとひとくくりし、まともに受け答えをしようとしない警察官から、見た目に左右されて内面を決めつけてしまうこと、自分のことに精一杯で他人に目を向ける余裕がない問題に改めて気付かされた。

私は本書から、想いこそが人を変え、また自己の存在を後押ししてくれるものであることを教えてもらった。

努力を生む「想い」

吉田　祐紀乃

本書は、プラハで日本の新感覚派の文学を研究する大学生ヤナと、日本を愛するあまりシブヤに閉じ込められた思念体のヤナとの物語が、同時進行で描かれている。プラハのヤナとシブヤのヤナは、どちらも互いの存在を認識していない。彼女らはそれぞれの世界に独立して生きる「別人」だ。作中で、ヤナは村上春樹の本を愛読していたが、「二人」の人物の視点が交互に描かれる物語の構造は、村上の『アフターダーク』と共通している。

このように、本作では多くの日本文学が取り上げられている。実在する作品や作家を物語と絡めることで、読者はどこにその要素が隠れているかを探しながら読むことができる。物語の本筋を追いつつ、宝探しのような快感を味わえる工夫は、読み手を惹きつける上で効果的だ。

更に作者は、作中作『恋人』とヤナの物語を巧みに呼応させている。作中作の主人公とヒロインの仲が深まるにつれて、この題名はヤナと男子学生クリーマの関係を表す語へと変わっていく。『恋人』はヤナによって翻訳される作品であると共に、本作の舞台回しの役割を果たしていると言えるだろう。プラハとシブヤ、作中作の三つの世界が相互に補完し合うことで、伏線が回収されていくのが興味深い。

また、研究対象に真摯に向き合うヤナの姿勢は、世代に関係なく読者の心を揺さぶるだろう。ヤナは、明治生まれの新感覚派の作家「川下清丸」に傾倒し、川下文学の研究を行っている。彼の作品は数点しか残っておらず、記録も少ない。それでもヤナは、川下の家族構成や歴史的事実、他の作家との交流を照らし合わせながら、彼の実像を浮かび上がらせていく。

ではなぜ、ヤナはこんなにも努力できるのか。私は、その鍵が本書の冒頭にあると考えた。幼き日のヤナが小説を書く場面。ヤナは、ページの真ん中に「十年後」と書き込み話を続けようとするが、ヤナの父はこれではだめだと注意をした。

「お前が飛ばした十年のあいだにあった出来事が興味を引くんじゃないか」

『恋人』におけるヒロイン「清子」が生まれた川越大火の年。それから十年ほど後に生まれ、清子に出会う主人公「聡（さとし）」。私小説的作品『恋人』に描かれた世界は、現実の出来事だったのか。ヤナの研究は、川下清丸――本名上田聡を巡る、空白の十年を埋める営みでもあった。無名作家の十年は、多くの人にとって取

るに足らないものだ。知ったところで何の利益もない。日常生活に影響が出るわけでもない。それでも、川下に心酔したヤナは、その十年に、情熱を注ぐ価値を見出した。一般的に「取るに足らない」「役に立たない」とされるものを突き詰める熱意は、文学研究だけでなく趣味の次元にも共通するように思われる。努力を生み出すヤナのような強い「想い」は、私たち読者も皆持っているのだと実感させられた。

物語は、「分裂」したヤナが元に戻れたのか明言されずに幕を閉じる。また、研究の結論についても言及されることはない。ヤナの「分裂」と川下文学の研究という二つのテーマは、どちらも不完全燃焼で終わっている。しかし、この唐突なラストによって、かえって読者は物語のその後を想像したくなるだろう。加えて、あとがきでは、架空の作家「川下清丸」が実在した人物であるかのように語られ、読者はますます物語の世界から抜け出せなくなる。現実世界に生きる本作の作者「アンナ・ツィマ」が、現実に存在した作家「横光利一」「菊池寛」などの名を用い、虚構の作家「川下清丸」について述べていく。虚構と現実が混ざり合う読書体験は、まさに「新感覚」だ。